

財団法人骨髄移植推進財団 第 1 回 広報推進委員会 議事録

日 時 : 平成 21 年 7 月 14 日 (火) 18 : 00 ~ 20 : 00

場 所 : 廣瀬第一ビル 2F 会議室

出席委員 : 太田陽一委員、佐々木利和副委員長、武市英雄委員、八木澤昌二委員長、
横尾和博委員、吉田寿哉委員

欠席委員 : 立岡ふじ美委員、松崎泰弘委員 (五十音順)

事務局 : 平井常務理事、大久保広報渉外部長、加賀美、五月女

〔 議 事 〕 (敬称略)

1 . 常務理事挨拶

平井常務理事より、次のとおり挨拶と検討課題についての説明が行われた。

平井 当財団は設立から 18 年目を迎え、ドナー登録者は当初の目標であった 30 万人を超え、移植数も昨年度 1,118 件、累計では昨年 12 月に 1 万件を超えた。現在、90%以上の患者さんに 1 人以上のドナー候補者が見つかる状況となっているが、実際には移植を希望する患者さんの 6 割しか移植に至っていない。大きな原因の一つは、コーディネートに時間がかかり患者さんの容態が悪化してしまうことであり、もう一つはドナーさんの健康状態や仕事の都合などによりコーディネートが途中で終了してしまうことである。これは仕方のないことでもあるが、この分をカバーするにはコーディネートが途中で終了しても、バックアップとなるドナーさんがすぐに見つかるようにするしかない。つまり財団は、今後とも 1 人でも多くの方にドナー登録をしてもらわなければならないという状況にある。

次に非血縁者間末梢血幹細胞移植 (P B S C T) についてであるが、これは骨髄移植とは異なる移植の方法である。この新しい方法がきちんと機能するためには、国民の皆様は P B S C T についてよく理解していただく必要があり、理解促進のための広報活動が重要になる。P B S C T は薬を使って血液中の造血幹細胞を増やし、成分献血と同様の手法でその細胞を採取する方法であるが、骨髄採取と違いドナーさんに対して全身麻酔や外科的手術の必要がなく、患者さんにとってはコーディネート期間短縮の可能性がメリットである。世界では、むしろ P B S C T の方が標準的な治療法であり、わが国でもできるだけ早くこの方法を導入し、一層の患者救命を図っていきたい。

以上により、ドナー登録の一層の推進と非血縁者間末梢血幹細胞移植に関する理解促進の 2 点が、骨髄バンクの広報活動にとって努力すべき、喫緊の大きな課題である。

一方、骨髄バンクの広報活動に関する状況は厳しいものがある。これまで大きな力となっていた公共広告機構 (A C) の支援が、昨年 6 月に中断になってしまった。また、昨年の秋以降、財団の重要な財源である寄付金が大きく減少している。資料に記載はないが、今年度の国庫補助金についても削減されている。このような状況の下、財団はより効果的な広報事業を展開しなければならない。

具体的な検討課題として、A C に替わって広く皆さんに訴えかけることのできる

マスコミ媒体へのアプローチの方法、限られた財源の中で効果的な広報活動を行なうために、自分たちの施策を点検する方法などについて、それぞれ専門分野を持つ委員の方々のご協力をお願いしたい。

2. 委員紹介

各委員のご紹介を行い、それぞれ短いご挨拶をいただいた。

3. 委員長及び副委員長の選出

「広報推進委員会規則」第 4 条に基づき、正岡理事長より八木澤委員が委員長に指名され、八木澤委員長より佐々木委員が副委員長に指名された。全員、異議なくこれを了承した。

委員長、副委員長にそれぞれご挨拶を頂いた。

八木澤 広報推進委員会は本年度中にあと 2 回の開催と聞いている。2 回でどのような成果を出せるのだろうかと心配している。お飾りの会議になってもいけない。AC のキャンペーンは無料のものだが広告費に換算すると年間 50 億円とか 100 億円とか言われており、それに替わる費用対効果のあるものがあるのか、今のところ全く思いつかない。また、財団については最近、悪いニュースばかりを聞く。それを覆さなくてはならないので、財団にはそういったことへの対応も考えてもらいたい。寄付金を集めることについては、われわれにそんなパワーがあるのかとも思う。費用対効果も出さねばならず、どうしたらよいか分からないままに委員長を引受けたというのが正直なところだ。

佐々木 私はこれまで献血に長く関わってきた。献血に来る方はドナー登録も快くしてくれる方が多いので、主に労力奉仕で協力してきた。広告やマスコミ関係には疎いので、このメンバーにいてもいいのかという気もしている。ただ、献血を通じて骨髄バンクに関わるようになり、患者さんや関係者の方々がボランティアとして骨髄バンクを応援していることを知った、こういった方達と融和していければ良いのではないかと感じている部分もある。テレビの宣伝効果は確かに素晴らしいが、実現するのは大変なことだ。業界にいる方がまとまれば何とかできるのではないかと感じている。

4. 審議

(1) ドナー登録の状況

大久保広報渉外部長より、標記について資料 1～4 に基づき説明が行われた。

(2) 財団広報活動の現状

大久保広報渉外部長より、標記について資料 5～15 に基づき説明が行われた。

(3) AC (公共広告機構) の支援について

大久保広報渉外部長より、標記について資料 16 に基づき説明が行われた。また、現在作成中の広報用映像素材について説明が行われた。

- 主な意見等 -

八木澤 〔資料 7 (かたりべ事業実施状況)〕で、福岡県の参加人数が突出しているが、何故か。

大久保 福岡県で開催された、青年会議所 (JC) の全国大会で実施したためである。

八木澤 〔資料 5 (媒体別チャンス請求数の推移)〕で、過去に比べてチャンスの請求数が半減しているのは何故か。

大久保 平成 17 年度より、ホームページでチャンスの内容を見て、登録申込書をダウンロードすることが可能になったため、財団にチャンス (パンフレット) を請求する方が減少したと考えられる。

吉田 メディアの内訳〔資料 5 (媒体別チャンス請求数の推移)〕の中に、インターネットや携帯サイトの広告が無いが、実施していないということか。

大久保 インターネット広告推進協議会 (JIAA) などにご協力いただいているが、この資料はチャンスの請求件数なので反映されていない。また、アクセス数自体のデータは持っていない。JIAA も持っていないということであった。

武市 〔資料 15 (ドナー登録者へのアンケート結果)〕を見ると、20 代、30 代の登録者が多いが、常にこのような傾向なのか。

大久保 登録会の場所によって異なる。企業では 30 代、40 代の方が多い。このデータもアンケートを行った会場の影響を受けていると思われるので、一概に同じ傾向とは言えない。

佐々木 説明員は全国でどれ位いるのか。

大久保 現在、約 860 名である。ただし、熊本県など説明員がいない所もあるので、そういった所では募集を行っている。

佐々木 説明員を増やすことは難しいのか。日赤の各献血ルームに配置できればよいと思うのだが。

大久保 説明員はボランティアの方が多いため、平日に人数を確保するのが困難である。

佐々木 日赤の方に説明をしてもらえば一番効率的だと思うのだが・・・。

平井 過去の経緯から日赤や財団の業務分担が決まっており、これを変更するのは困難な状況である。

佐々木 そのあたり、行政にがんばってもらうわけには行かないのか。

大久保 制度的なものを变えるのは困難だが、協力関係という点では各都道府県によって状況は異なる。やはり登録者数が多いところでは、行政や日赤とよい関係を築けているようだ。

武市 各県に財団の支部のようなものがあるのだろうか。

大久保 財団の支部はないが説明員が各県にいますので、資料なども送っている。説明員の研修については全国をいくつかのブロックに分けて行っている。

八木澤 地区普及広報委員は全国に何人位いるのか。

大久保 100名程度である。

八木澤 その方たちの判断で登録会などを行っているのか。

大久保 行政などに対する窓口となって活動してもらっているが、どうしても限界はあるようだ。

横尾 今日の説明を聞いたところの私の認識だが、ドナー登録の推進にはACのテレビ等を使った大規模な宣伝の部分と、登録会等の現場での日赤や行政と一緒にした組織活動の部分があり、ACのキャンペーンが中止になったために宣伝の部分で現在苦労していて、その影響で組織活動でも苦労しているということのようだが、その理解でよいのか。例えば、宣伝はなくても街頭の呼びかけなど、組織活動を強化すれば登録者は伸びるのだろうか。

大久保 ACの力は非常に大きく、骨髄バンクの知名度は高くなったが、キャンペーンの終了によって、今後、若い方の認知度が低くなっていくのではと思っている。何か新しい宣伝活動を行わないと各地域での登録活動にも影響が出て、登録者の減少につながるのではないかと危惧している。

横尾 ということは、登録者の年齢は18歳から54歳に限られているのだから、そこに向かって、費用対効果を考えながら宣伝を行っていくことが効果的な対策になるということか。

大久保 そう考えている。

太田 [資料11(寄付金額・件数の推移)]を見ると、金額ベースでは団体の寄付が半分を占めている。企業からの寄付が多いと思うのだが、製薬会社の寄付の割合はどれ位あるのか。

大久保 一部である。

太田 広報はお金なので、どこから取ってこなければならぬ。そういう意味で、現状のびしりのある所を探すというのは難しいのだろうか。

大久保 企業にもお願いに行っているが、現状は厳しい。寄付をいただいているところも、金額は減ってきている。今月はバンクニュースの発行時期であるため、寄付金も増える時期だが、最近の傾向として単価が低くなっている感じがする。

吉田 「ジャクラビジョン」や「フューチャービジョン」について、効果を測定したものがあれば、知りたい。

大久保 残念ながら、追跡調査はできていない。

吉田 それでも続けている理由は何か。

大久保 現在、多くの若い方が自動車教習所に通っている。卒業するまでには50日以上通うということであり、宣伝効果を期待している。

吉田 登録者のアンケートに結果は出ているのか。

大久保 このアンケートには反映されていないと思う。

佐々木 非血縁者間末梢血幹細胞移植は実施の可能性が高いのか。今後どんどん宣伝してよいのか。全身麻酔をかけないというのは、ドナーにとっては大きな魅力ではないかと思うのだが。

平井 財団としては、一刻も早く制度として実施できるよう、補助金や診療報酬について、来年度からの適用を国に要望している。そこが認められれば、来年度からの実施が可能になるという状況である。

武市 「非血縁者間末梢血幹細胞移植」という言い方は、長くて難しい。もう少しイメージをしやすい名前にならないものか。

平井 学会で使っている用語をそのまま使用しているわけだが、分かりにくいのは確かだ。

八木澤 広報の予算について、どのようなことにいくら使われていて、成果が現れているのはどこなのか、ということについて聞きたい。

平井 「ジャクラビジョン」のところでも費用対効果の話があったが、我々としても、どのように費用対効果を測ればよいのか分からない状況である。よい方法があればご教示いただきたい。財団が行っている広報事業を一定の指標で点検するという作業をこの委員会で実現したいと考えている。

八木澤 広報予算の内訳はざっくり言って、どのようになっているのか。

吉田 広報の課題解決のために、どの程度の費用を使えるのか知りたい。

大久保 全体で2億5千数百万のうち、3割弱が人件費、地区普及広報委員等の活動費が約1千3百万、旅費交通費が約1千7百万、通信運搬費が約6千3百万、印刷製本費が約4千7百万、委託料・手数料が約3千万、使用料・賃借料が約1千万で、およそ2億5千万になる。

八木澤 ざっくり言うと、人件費、通信運搬費、印刷製本費が大きく、マスコミ等に使う費用は今のところゼロということだ。

大久保 「ジャクラビジョン」の費用は含まれているが、マスコミ等の広告宣伝費という意味では、あまりかけていない。

八木澤 そうすると、こらからやることも1年間で1千万円程度の事業ということでしょうか。

平井 現在行っている事業を点検して、より効果的なものがあれば差換えたい。スクラップアンドビルドの形で考える。

八木澤 今までの話を聞いていると、例えばパンフレットの印刷などは必須だと思う。これを削ってマスコミ対策をしても仕方ない。そうすると、現状ではやりようがないのではないか。

大久保 この委員会で検討していただいて、来年度の事業で予算を確保するとか、事業を入れ替えるといったことを行いたい。

八木澤　　あと 2 回でどうしたら答えが出るのか。今後の会議の進め方などについて、みなさんのご意見を伺いたい。

武市　　いろいろな種類のパンフレットがあるようだが、家に送られるものはほとんど見ないのが実情だ。何かを新しいものに変えるということであれば、この辺りで何かできないか。

太田　　予算のことを考えると、ボランティアベースでアイデアを考えなければならないかと思う。パブリシティといってもこの経済的に厳しい状況では、これから考えてみようということしか、今のところ言えない。

佐々木　　この会で従来の発想を転換するようなアイデアを提供することによって、財団の職員にも発想の転換を図ってもらえるのではないか。課題について勉強をして、発想の転換を図るチャンスになるような会にしたい。

横尾　　事務局には次回までに、先ほど話に出た予算の資料と、できれば具体的な事業のアイデアのたたき台を作ってもらいたい。

吉田　　ダイレクトメールを開封する手間というのは、このインターネット時代にはそぐわない。ドナー登録の主なターゲットが 20 代、30 代であり、予算も限られていることを考慮すると、インターネットと携帯の可能性に特化した方がよいと思う。インターネットや携帯なら、費用対効果についても反応 1 件あたりのコスト（コストパーレスポンス）等の指標を活用できる。限られた予算を使うなら、その方が現在よりも有効な使い方ができるのではないか。例えばユーチューブのような、費用をかけずに拡散していくような方法を考えなくてはいけない。

来年度以降のことについて言えば、うちのクリエイターにボランティアベースでアイデアを依頼することはできるが、10 万でも 20 万でも制作費を出してもらえないかという話は必ずくる。これは皆さんのところでも同じだと思う。自分とはともかく、チームとして動く時に多少の費用を認めてもらえればと思う。

八木澤　　今回は事前に事務局からテーマを出してもらって、事前に各委員が考えてくるといふことにすれば、集まったときに具体的な議論ができると思う。反対に委員の方からもご意見をいただければ、事前に事務局にまとめてもらえる。事務局には準備をお願いしたい。

5. 今後の予定

今後の日程については 10 月を目処に、後日調整することとされた。